『帰ってきたコースケ』（仮題）

登場人物

北村甲介（２７）　牧野裕夢

北村昇（５５）　橋本亜紀

北村英恵（５３）　和田圭市

堀口由紀（２７）　かなた千乃

北村チヱ（７６）　落合ひとみ

山崎豊（２７）　松田剛哉

霊能者寺田（３５）　風起

1

郊外の一軒家

縁側で老婆、北村チヱがボーっと外を見ている。

2

同・居間

小さな机の上に骨壺と遺影。
遺影の主は北村甲介。
その遺影に手を合わせる堀口由紀。
手を合わせ終わり、
後ろで見ていた北村昇と北村英恵に

由　紀「じゃあ、私、帰りますね。明日から研修で大阪行かなきゃいけなくて」

英　恵「色々手伝ってくれてありがとうね」

由　紀「そんな」

昇　「突然の事で、俺ら、放心状態で、何をどうしたらいいか分からないし。本当由紀ちゃんが手伝ってくれて助かっ

たよ」

由　紀「実は、甲介から事故に遭う前の日に話があるって電話があって。その話が何だったのか、すごく気になって、出来るだけ、そばに居れば、その話が何だったのかわかるかなって思って」

英　恵「話って、何だったのかね・・・・。どうせ、大した話じゃないとは思うけど。色々心配かけてごめんね」

由　紀「そんな事」

チヱの声「ほら、甲介が帰ってきたよ！」

昇　「最近、ボケがひでぇからな・・・」

チヱの声「英恵さん、甲介だって」

英　恵「しょうがないねえ・・」

英恵、仕方なくチヱの方へ向かい

英　恵「おばあちゃん、甲介はね・・・・・」

と言いながら、チヱのいる縁側に行こうとすると、チヱの前には甲介。

英　恵「ひえぇぇぇー」

英恵の叫びに昇と由紀も縁側に出てくると

昇　「どうしたんだよ」

と、英恵に声をかける昇。

英恵が指さす先を見ると甲介がいる。

甲　介「親父。ただいま」

昇　「あわわわわわ・・・・・・」

腰が抜けその場に座り込んでしまう。

甲　介「二人とも、何してんだよ」

と、言い二人の傍に近づく。

英　恵「あ、足はあるよ」

昇　「ああ」

と、奥から由紀が出てくる。

甲　介「あれ、由紀どうしてウチにいるんだよ」

由　紀「うん・・・ちょっと用事があって」

甲　介「丁度良かった。お前に話しがあるんだけど。明日とかどう？」

由　紀「ごめん。明日から研修で大阪行かなきゃならないの」

甲　介「そうか。いつ帰って来るの」
由　紀「四日後」
甲　介「じゃあ、帰ってきたら連絡くれるか？」
由　紀「分かった。今度はちゃんと話してよ」
甲　介「何が？」
由　紀「ううん。じゃあ四日後ね（英恵たちに）私、帰りますね」
英　恵「（小声で）これは、内緒にね」
由　紀「はい。甲介。四日後だよ」
甲　介「ああ」
由紀、出ていく。見送る三人。
甲　介「何か、眠いや。少し寝るわ」
そう言い、縁側の横の部屋で横になる甲介。
お互いの頬をつねる英恵と昇
英　恵「夢じゃないよね」
昇　「ああ」
チ　ヱ「英恵さん。甲介が帰って来たんだから、今日はご馳走だね」

英　恵「そうだね。おばあちゃん。ごちそう一杯作ろうね」

そう言って、居間に戻る。

昇、遺影などを片している。

英　恵「あんた」

昇　「あいつが見たら驚くだろ」

英　恵「そうだね」

昇　「（涙をこぼしながら）甲介は生きてたんだよ。死んでなんかいなかった。俺たちは悪い夢を見てたんだよ」

英　恵「（もらい泣きして）そうだね。料理目一杯美味しく作るよ」

昇　「ああ。頼むぜ」

寝ている甲介。

3

同・居間（夜）

テーブルの上には豪勢な料理が並ぶ。

甲　介「スゲーご馳走だな」

昇　「お前が帰って」
英　恵「（咳をして）ゴホッ」
昇　「あ、お前が久しぶりにかえってきたからな」
チ　ヱ「盆と正月が一緒に来たみたいだね」
英　恵「腕によりかけたからねえ」
昇　「じゃあ、いただきます」
全　員「いただきます」
チヱ、バクバクと食べていく。
チ　ヱ「美味しいねえ」
昇も食べる。
甲介、箸を延ばそうとするが、何も取らない
英　恵「どうしたの？」
甲　介「うん？なんか腹減らなくて。ご馳走様」
そう言い、席を立つ甲介
英　恵「甲介。そう言わずにさ」
甲介を追おうとする英恵を昇押さえて
昇　「いいじゃねえか。腹減らないって言ってんだから」

英　恵「・・・・」
チ　ヱ「大丈夫だよ。甲介の分の私が食べるから」
昇　「ばあさん」
チヱ、バクバクと食べていく。

4
縁側
甲介来て、座り込む。その姿を月が照らす。

5
街の実景
テロップ「翌日」

6
街中
歩いている甲介。と、離れた所に山崎豊を見つける。
甲　介「山ちゃん」

その声に振り替える山崎。

山　崎「甲介・・・・・」

甲介を見て驚く山崎。甲介が山崎に近づいてくる。

山　崎「あわわわわ・・・・」

山崎走り出す。

甲　介「山ちゃん」

甲介、山崎を追う。

山　崎「なんで？なんで？」

必死に逃げる山崎だが、その差が縮まっていき

7

路地

甲介が山崎に追いつく。

甲　介「山ちゃん。何で逃げんだよ」

山　崎「ごめんなさい。騙すつもりはなかったんです」

甲　介「何言ってんだよ」

山　崎「これ、借りた五万。あ、利子も付けて十万返します。だ

から、成仏してください」

甲　介「あ、確か、五万貸したよな」

山　崎「でしょ。利子も付けるから」

甲　介「いらねえよ。利子なんて」

山　崎「ダメ。これ渡すからちゃんと成仏してください」

山崎、甲介の手に十万を握らせると走り出す。

甲　介「山ちゃん！」

脱兎のごとく走る山崎

山　崎「ああ、俺幽霊の手触っちゃった。どうしよう」

走り去る山崎。

8

北村家・表

山崎が寺田と共にやって来て，

玄関のチャイムを鳴らす。

9

同・玄関・中